九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

京都府立総合資料館蔵『古今集註』翻刻と解題（一）

日高，愛子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/10329

出版情報：文獻探究. 45, pp.22-49, 2007-03-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

京都府立総合資料館蔵『古今集註』翻刻と解題（一）

日高愛子

一　解題

飛鳥井家は、雅経（嘉応二年〈一一七〇〉―承久三年〈一二二一〉）が飛鳥井を号して後、和歌・蹴鞠両道の家として近世まで続いた。この飛鳥井家による『古今和歌集』の講釈の聞書として名高いものに『古今栄雅抄』がある。『古今栄雅抄』は、その書名にも見るように「栄雅」こと飛鳥井雅親（応永二四年〈一四一七〉―延徳二年〈一四九〇〉）が足利義政（永享八年〈一四三六〉―延徳二年〈一四九〇〉）に講釈を行った際の聞書である。しかしながら、この原聞書は一向一揆により一度焼失しており、後に『古今栄雅抄』として世に流布した書が、永禄四年（一五六二）二月の奥書によって僅かに知られる「玉信」なる七十歳余りの老人の手によって復原されたものであることは、既に片桐洋一氏（『中世古今集注釈書解題　四』赤尾照文堂、昭和五九年）によって指摘される通りである。したがって、『古今栄雅抄』と称する書は、諸本の引用や「玉信」自らが良鎮より伝授を受ける筈であった一条兼良の説など他説を多く交えており、飛鳥井家説を記した原聞書とは若干様相を異にするものとなっているに違いない。

この『古今栄雅抄』の他に、栄雅の講釈を聞書したものとしては、現在四種の本が確認されている。新井栄蔵氏「栄雅の〈古今集注〉をめぐって―古今集注釈史論―」（『国語と国文学』五二号、昭和五〇年九月）に依れば、以下の四本である。

①今治市河野信一記念文化館蔵本（以下、「河野本」と略称する。）
　写本一冊
　（外題）「蓮心院殿説古今集註」
②京都大学蔵本（以下、「朱書本」と略称する。）
　刊本『両度聞書』六巻八冊の余白・行間にある書入
　（外題）「古今和歌集抄」　（内題）「古今和歌集両度聞書」
③広島大学蔵本（以下、「為和本」と略称する。）
　写本二巻二冊の本文部分
　（外題）「古今聞書上（下）　為和卿筆」（墨消・判読不能）」
④京都府立総合資料館蔵本（以下、「京府本」と略称する。）
　写本一冊存（巻十一（恋歌一）以下のみ残存）
　（外題）「古今集　合本／恋哥　全」

これら四本については、新井栄蔵・泉紀子[注(1)]両氏により既に基礎的研究がなされているが、書誌的事項と系統本としての位置付けについて、私見を加えて以下に記すことにする。

①河野本は、表紙左肩に打付け書で「蓮心院殿説古今集註」とあるが、この「蓮心院」とは栄雅の法号である。また、一丁表には「青谿／書屋」（朱文方印　縦一・一糎×横一・一糎）の印がある。この①河野本と同系統（仮にA系統と称する）と考えられるのが、②朱書本の寛永一五（一六三八）年版『両度聞書』の余白及び行間に施された朱・墨筆による書入れであり、①河野本と本文・識語共にほぼ一致する。ただし、①河野本の識語にも「右以或本書之、不審之事等雖有数多、旦任本書之、此本又早卒写之、無正躰者也、重得証本而、可校正而已」とあるように、この二本は、純粋な栄雅講釈の聞書とはいえず、飛鳥井家説とは異なる他説も加筆するなど、原聞書の改編本といえる。

一方、③為和本と④京府本は、右の二本とは若干ながら系統を異にする伝本である。④京府本は『古今和歌集』巻一から巻十までが欠けており、その全貌は定かではないが、残存する本文を見る限り③為和本とほぼ一致することから、これと同系統（仮にB系統と称する）とみなして間違いなかろう。

③為和本については、外題に「古今聞書上（下）　為和卿筆」（墨消）」とあり、これを納める箱蓋中央にも「古今聞書／歌道心得書二部冷泉為和卿筆」とあるが、この本が冷泉為和（文明一八年〈一四八六〉―天文一八〈一五四九〉）の手になるとは考えにくい。この本には他本に見られぬ書入れ（本文と同筆）が非常に多く、巻末に「御来迎院殿御注分　法名宗清」として、宗清、すなわち為和の父、冷泉為広（宝徳二年〈一四五〇〉―大永六年〈一五二六〉）の注釈分が付されるなど、冷泉家説も加筆されている。また、箱蓋の裏面には、「此書は此持主橘正済東京のちまたにて得る処なり　かゝる珍宝の市中に出ることは過にし戊辰の年世間瓦解したるによりてなるへし　此より古筆了仲翁に見せけれはこは烏丸大納言光広卿の真跡也といふ」と墨書されている。「東京」とあることからも「過ぎにし戊辰の年世間瓦解したる」とは、明治維新をさすと思われる。したがって、この箱書きもその時期のものと推測されるわけであるが、果たしてこの本が烏丸光広の手になるか否かは疑わしい。いずれにせよ、この本に見られる膨大な書入れは、飛鳥井家説に基づくものからは離れており、本文と書入れとの区別も判然としない。このような点から考えるに、③為和本は栄雅の講釈の原聞書とはいささか様相を異にするものであろう。

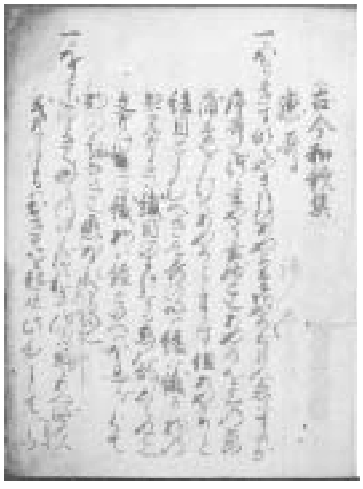
私に仮に称したA系統については、片桐氏によって①河野本の翻刻がなされているが、このA系統とB系統とでは僅かながら本文に違いがある。例えば、A系統が歌注のない歌についてはその多くを省略するのに対し、B系統では歌注のないものについても歌を記すなどしている。また、A系統とB系統では異なる歌注なども見られる。しかし、A系統は先に述べたように原聞書の改編本としての要素が多々あること、そしてB系統に位置付けられる③為和本についても、書入れなどの加筆が多く、原聞書に近いとは認めがたい点を考慮すると、残欠本ではあるものの、より原聞書の面影を残すのは④京府本だといえるのである。

本稿では、栄雅、ひいては飛鳥井家の古今集注釈の具体相を知る手掛かりの一つとして、この④京府本（残存する巻十一～二十）を翻刻する。④京府本の詳細な書誌は以下の通りである。

所蔵者　京都府立総合資料館
分類番号　特／８３１／３６
外題　表紙左肩に「古今集合本／恋哥全」と打付け書。
内題　古今和歌集
表紙　白茶色流水文様
巻冊数　一冊存（『古今和歌集』巻十一～巻二十）
書型　大本（縦二六・〇糎×横二〇・九糎）
装丁　袋綴
料紙　楮紙
遊紙　前一紙、後一紙あり。
丁数　墨付一〇〇丁
書入れ　主に歌人名を朱書で記す。その他墨書による書入れもある。
貼紙　二六丁表に一紙、二六丁と二七丁の間に一紙。
蔵書印　「京都／図書／館印」（朱文方印　縦六・四糎×横六・四糎）
「信古堂」（白文長方印　縦二・四糎×横〇・九糎）
「凌雲亭」（白文長方印　縦二・五糎×横〇・九糎）
注記　巻末に「古今和歌集序　紀淑望」及び、和歌作者一覧を付す。

▲表紙

一丁表（内題）▼



▲九一丁表（識語）

二　翻刻

凡例

一、本文の表記については、用字等なるべく原文のままとしたが、旧字体については新字体に直した。

一、朱書については、書体を**ゴシック体**で示した。

一、字の左側に読みなど付されているものについては、原稿の都合上右側の（　）内に示した。

一、貼り紙や挟まれた紙に書かれたものついては、［　］内に示した。

一、冒頭に『新編国歌大観』に依る歌番号を付した。尚、詞書きに対する注に関しては、その歌番号を［　］で示し、歌注と判別できるようにした。

一、系統の異なるA系統本との異同を記載した。その際、用字の違い等の細かな異同については言及せず、注目すべき異同がある場合にのみ、傍線（該当箇所の無いものについては＊）を付し、直後に【校異】として示した。この場合のA系統本の本文は、今治市河野信一記念文化蔵本（片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題　四』に依る）をもって代表させた。これは、同じくA系統本の京都大学蔵本（朱書本）が刊本『両度聞書』への書入れであることを考慮したためである。

一、今治市河野信一記念文化蔵本の本文にない歌注等については、その歌番号に▒をかけて示した。

一、紙面の都合上、今号は恋歌一から恋歌四までの翻刻を掲載する。残る翻刻は、次号以降に順次掲載することにしたい。

古今和歌集
恋哥

469 **読人しらす**

一ほとゝきすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな
序哥也つゝけやう玄妙と也あやめを上の菖蒲草をうけてあやめとよます但あやめと綾目とよむへき歟哥の心は綾は織る物の惣名なれは織目のわけをも恋の乱ニしらぬと也文（モン）なけれとも織物は紋といへはほれ〳〵しくて物の分なき也恋ほれたる心也

470 **素性法師**

一をとにのみきくのしらつゆよるはおきてひるは思にあへすけぬへし
義なしよるはおきてを起也此心にても可用又置也何も所好ニよるへしなすらへ哥の類也

【校異】此心にても可用―＊

471 **紀貫之**

一吉野河いは浪たかく行水のはやくそ人を思そめてし
義なし吉野河早也はやくそ人をとはとくより人を思心也

【校異】思―おもひそめたる

472 **藤原勝臣**

一白浪のあとなきかたに行船も風そたよりのしるへなりける
舟の方にては一行の風ニ任て行ゑしらぬとなり恋の方にては風の便也便の人ニつけてわさとならすいひよりたき心也　媒（ナカタチ）（ハイ）の事也初尋縁恋の哥の躰也

【校異】一行―一片　初尋縁恋―初尋恋

在原元方

473
一をとは山をとにきゝつゝ相坂の関のこなたに年をふる哉
あふと云名のある関のこなたとはあはぬ心也としをふるとは逢事なくてなからへたる心也

同

474
一立帰あはれとそ思よそにても人に心をたきつしら浪
たちかへりは我身を立かへりてみれは我なから身を哀と思也よそなからたに人に心をつくして身をくたくと也人に心をゝくとは隔心にあらす心をかけたる也人をおもふ心中をよくもしらぬをあはれと思心也。（＊）

【校異】＊―或抄云、歌の心、よそながらにてさぞとだにしられぬことをなげけど、をしかへし思へば、それもあはれに覚ゆ。さるべき契ありてやなど、おもひ入たるよしにや。人に心を興津しらなみとは、心をかけたると也。此集のおくに、など世中の玉だすきなると云も、中〳〵にかけたるをくるしとよめる也

つらゆき

475
一世中はかくこそありけれ吹風のめにみぬ人も恋しかりける
義なし人間万事如此ありと也

［476］
一右近の馬場の日をりの日左近といふと云事もあり業平は左近中将右近少将ニてありし也古ヲも種々説あり朱雀院のぬり籠ニかんや紙にて業平自筆ニ書たる本ニ右近馬場の日とはかりありひをりの日とはなし女のかほのとあるを二条の后の御事とありひをりの日の事種々説あり不用只まて　対（ツカイカノ字ヲニコル）　の人褐（カチ）と云装束のしりを引をる也それをきの一字を略してひをりと云也四日は左近五日は右近の馬場也大和物語異本の伊勢物語ニみすもあらすの返哥ニ見みも見すもたれとしりてかこひらるゝおほつかなみのけふのなかめやと返しありて其後又しるしらぬなにかあやなくの返し又あるとあり大和物ニしるしらぬの哥はなくてみも見すもの返しはかりあり俊頼此しるしらぬの返しあはぬよしありしと也さらにあはすといひかたしと也

【校異】此右近を左近と云ともあり

在原業平朝臣

476
一みすもあらす見もせぬ人のこひしくはあやなくけふやなかめくらさん
義なし

返し

よみ人しらす

477
一しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思のみそしるへ成けれ
義なし

鹿嶋大明神春日一躰之御事也

［478］
一かすかのまつりにまかれりける時とは鹿嶋（カシマ）より神護景雲年号也中ニ大和へやうかうの始より今ニ絶すある祭也その勅使ニ摂家の御人も立給ふなり忠岑は舞人（マヒウト）にて随也勅使の前に時の花をかさして随也

【校異】かすかのまつりにまかれりける時とは―かすがまつり、此春日祭は絶す―絶せぬ　ある祭―祭

みふのたゝみね

478
一春日野の雪まをわけておひいてくる草のはつかにみえしきみはワ
義なし草のはつかとははつかにそとみえたる心なり君はもとは君は也きてもいかになと言をのこしたる哥の躰なり

［479］
一花つみの事前にも此類あり

つらゆき

479 一山さくら霞のまよりほのかにもみてし人こそ恋しかりけれ
義なし

もとかた

480 一たよりにもあらぬ思のあやしきは心を人につくるなりけり
何の便をもしらぬ人ニ心をつくすは我なからあやしきと也

【校異】便を―便宜

凡河内みつね

481 一はつかりのはつかにこゑをきゝしよりなかそらにのみ物を思かな
初鴈にあらすはつかいはん為也例の序哥也

つらゆき

482 一あふ事は雲井はるかになる神のをとにきゝつゝ恋わたるかな
是も序哥の心也逢事よせて也逢事なくは命もなからへかたきと也

よみ人しらす

483 一かたいとをこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせん

同

484 一ゆふくれは雲のはたてに物そ思あまつそらなる人をこふとて
義なし雲のあひたにすち〳〵のあるを云也日の光のあるを雲へたてのさすとみゆる也（＊）

【校異】義なし雲のあひたにすち〳〵のあるを云也日の光のあるを雲へたてのさすとみゆる也―雲の旗手とは、日の人ぬる山に光のすぢ〳〵立のぼりたるやうにみゆる雲の旗の手のさすに似たるを云也　＊―又、蛛の手の由に書たるものもあれど、あまつ空なるなどよめる歌、空ならで疑べきに非也。重也。之蔵蛛とよみたるも雲のはたてなれど、蛛によそへてよむ、なるべき事にあらず

485 一かりこもの思ひみたれて我（ワレ）こふといもしるらめや人しつけすは

同

かりこもは思みたれていはんため也いもと云事夫婦ニ成てこそあるへきニ今は思をかくるによりていもと云也しるらめやとはやはしると云心也万葉ニ苅こもを乱るゝとよむ也

同

486 一つれもなき人をやねたく白露のおくとはなけきぬとは忍はん
義なし露の置を我おくるとぬとは寝るによせてよむ也なすらへ哥の類也

同

487 一ちはやふるかものやしろのゆふたすきひとひも君をかけぬ日はなし
序哥也神の社とある本あり不用ゆふたすきはまさきのかつら（ラ）なとを冠ニかくる事ありたすきと云事かくると云ニ付ての言也

同

488 一我こひはむなしきそらにみちぬらし思やれともゆく方もなし
義なし

同

489 一するかなるたこのうら波たえぬ日はあれともきみをこひぬ日はなし
義なし風あらくて波たかき海也越中ふせの郡ニあるたこは湖（ミツウミ）也藤をよむ名所也わかめかるとは丹後ニあり丹後とよむ也伊勢国の海をは伊勢海と云也

490 一ゆふつく夜さすやをかへの松のはのいつともわかぬこひもするかな
異義なし松の葉の時をわかぬことくに我こひもあるとなり　同

491 一あし引の山下みつの木かくれてたきつ心をせきそかねつる
義なし瀧つ心はたきにあらすたきつたる心也　同

492 一吉野河いはきりとおしゆく水のをとにはたちし恋はしぬとも
義なし　同

493 一たきつせのなかにもよとはありてふをなとわか恋のふちせともなき
いかなるたきる瀧にも淀のあるにわか心のしつ心なきと也
【校異】たきる瀧―瀧つ

494 一山たかみ下ゆく水のしたにのみなかれてこひむこひはしぬとも
義なし　同

495 一思いつるときはの山のいはつゝしいはねはこそあれ恋しき物を
義なし序哥也
【校異】序哥也―＊

496 一ひとしれす思へはくるし紅のするゝつむ花の色にいてなん
色にあまたあり紅はさし出てけんちよなる色にてある也又心の臙脂(サウ)の色赤也末つむ花は出羽のあさ花ニ作紅の事也貫之の哥さけはつむ物と思しくれなゐは涙のみする色にそありける　同

497 一秋のゝおはなにましりさく花の色にやこひんあふよしをなみ
義なしりうたんの花なとの事なるへしと也色にや恋んとは色にいてゝやこひんと也　同

498 一わかそのゝむめのほつえ(はつ)に鶯のねに鳴ぬへき恋もするかな
序哥也梅の末の枝也つほめるを云とあり万葉ニ柳にもほつえと也つほめるにあらす
【校異】ほつえと書て、そばにはつえとつけたる本にて、ほつえ、はつえ同事。梅の末の枝也。又、ほつえ、つぼめる枝をいふと云説もありと申されき。万葉集に、柳にもほそ(つ)枝とよみたり。それも同事歟。十二月によめる歌也　同

499 一あしひきの山郭公わかことやきみにこひつゝいねかてにする
義なしことやは如(コトク)也
【校異】ことやは如也―＊　同

500 一夏なれはやとにふすふるかやり火のいつまてわか身下もえをせん
義なし蚊遣火は夏なれはする物也我こひはさていつをかきりともなきと也　同

501 一恋せしとみたらし河にせしみそき神はうけすそ成にけらしも
伊物にはらふるまゝになと云所の心にて神はうけすその所を心

得へし

502 一あはれてふことたになくは何をかは恋のみたれのつかねをにせん　同
我をあはれやといふほとの事さへなくては我恋のみたれたるを
はなにとせんと也つかねをとは束の字也乱たる物思ゆひ合する
物也

503 一おもふにはしのふることそまけにける色にはいてしと思し物を　同
義なし此上句伊物ニあり色にはいてしときりてと思し物をとよ
む也

504 一我恋を人しるらめやしきたへの枕のみこそしらはしるらめ　同
人はえしらしと也枕の恋を知と云事連綿事也

505 一あさちふのをのゝしのはらしのふとも人しるらめやいふ人なしに　同
序哥也義なし此人しるらめやは人やしらうするとうたかふ心也

506 一人しれぬ思やなそとあしかきのまちかけれとも逢よしのなき　同
是も逢よしのなきといはん為也蘆にてしたる墻の間ニちかきに
は兆す蘆の節たかくてをしよせてゆへともまはらなる事を云也
古き尺（シヤク）ニ兆す

507 一おもふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくとくる下ひも　同
なにともあれ人にあふましきと也とくる下ひもとは人かこふれ
は紐かとくると也義なし

508 一いて我を人なとかめそおほ船のゆたのたゆたに物思ころそ　同
義なし猶与ヤスラウ也ためらふ也万葉哥ニ　我心ゆたのたゆたに
うきぬなは（浪也）へにもおきにもよりやかねまし（＊）
【校異】猶与ヤスラウ也―猶豫、タチモトフル也　＊―此歌の心もうきぬなは浪にゆ
られてたゆたふ心と聞ゆ。あるひは舟に入水をかく手のたゆきと云説あ
れども、それは不用。只兎角たゆたひて物おもふよしとぞ聞侍し

509 一伊勢のうみに釣するあまのうけなれや心ひとつをさためかねつる　同
義なし序哥也
【校異】序哥也―＊

510 一いせの海のあまのつりなは打はへてくるしとのみや思わたらむ　同
義なしたくなわと一本也

511 一涙河なにみなかみをたつねけん物思時の我身也けり　同
義なし

512 一たねしあれはいはにも松はおひにけり恋をしこひはあはさらめや　同
も
義なしこひをしこひはとよむ也
【校異】こひをしこひはとよむ也―＊

513 一あさな〳〵たつかはきりの空にのみうきて思のある世なりけり
序哥也義なし

514 一わすらるゝ時しなければあしたつの思みたれてねをのみそなく
義なしあしたつ蘆の中ニあれはあしたつとあし鴨同前也
同

515 一唐衣日もゆふくれになる時は返々そ人は恋しき
義なし返々は衣の縁言也夜は衣を着かゆる事あり
同

516 一よゐ〳〵に枕さためん方もなしいかにねしよかゆめにみえけん
義なし
同

517 一こひしきに命をかふる物ならはしにはやすくそあるへかりける
義なししにはやすくとは死する事は安くあるへきとなり
【校異】しにはやすくとは死する事は安くあるへきとなり―＊

518 一人の身もならはし物をあはすしていさ心みむ恋やしぬると
義なし
同

519 一しのふれはくるしき物を人しれす思ふてふ事誰かかたらん
義なし思ふてふ事とはおもひといふ事也
同

520 一こむ世にもはや成なゝんめのまへにつれなき人を昔と思はん
来世ニなれと也杲（ムクヒ）をみせんと也つれなき人を昔とおもはんと
はつらき人を昔人ニなして見むとなり
【校異】つれなき人を昔とおもはんとは―＊

521 一つれもなき人をこふとて山ひこのこたへするまてなけきつるかな
義なし
同

522 一ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふ成けり
義なしかすかくとは畫の事也経ニ云　亦（ヤクニョクワスイ（マタコトシエカクミツニ））如　畫　水
亦（ヤクスイショスイカウ（マタシタカツテカクシタカイアウ））随　書　随　合とあり
同

523 一人をおもふ心は我にあらねはや身のまとふたにしられさるらん
義なし
同

524 一おもひやるさかひはるかに成やする迷夢ちにあふ人のなき
義なしまとふ夢ちにあふ人もなきはいかひ心也俊頼の日くるれ
はあふ人もなしまさきちるもこれよりいてたる哥也
同

525 一夢のうちにあひみむことをたのみつゝくらせるよゐはねん方もな
し
義なしねんかたもなしはいかにねてか夢にみゆると思心也
【校異】ねんかたもなしは―＊

526 一こひしねとするわさならしむはたまのよるはすからに夢にみえつ
ゝ
むはたまの事万葉ニはぬは玉とあり天徳の哥合ニむは玉の夜の夢
たにまさしくは我思ふことを人に見せはやとありしをぬは玉と
こそあるへけれとありてかきあやまりとて負ニなりしと也但ぬ

は玉むは玉同事也と心得へしむは玉をつねに用へ[ママ]へき也よる
はすからとは夜もすから也

同

527 一涙河枕なかるゝうきねには夢もさたかにみえすそ有ける
義なし

同

528 一恋すれはわか身はかけとなりにけりさりとて人にそはぬ物ゆへ
義なしやせたるをは影のやう[ニ]なると云也影形とならは思人[ニ]そ
ふにてもなしと也

【校異】影形とならは思人[ニ]そふにてもなしと也―＊

同

529 一かゝり火にあらぬ我身のなそもかく涙の河にうきてもゆらん
義なし 錠(カヾリ) 本字也篝是は少心かはる歟

同

530 一篝火の影となる身のわひしきは流てしたにもゆる也けり
義なし

同

531 一はやきせにみるめおひせはわか袖の涙の川にうへまし物を
義なしみる[ママ]はふかき所におふる也涙川のみるめなきよしなり

同

532 一おきへ(辺)にもよらぬ玉もの浪のうへにみたれてのみや恋わかりなん
おきへ思ふ人を沖にしてその辺へもよらぬと也おきへとよむ也
いそへ川へ山へには相違すおきへとよむ也

同

533 一あしかものさはくいりえの白浪のしらすや人をかくこひんとは
義なし

同

534 一ひとしれぬおもひをつねにするかなるふしの山こそわか身成けれ
義なし

同

535 一とふ鳥のこゑもきこえぬおく山のふるき心を人はしるらん
同 序哥也

同

536 一あふさかのゆふつけとりもわかことく人や恋しきねのみなくらん
同

同

537 一相坂の関になかるゝいはし水いはて心におもひこそすれ
同 いはてといはん為也

【校異】いはてといはん為也―＊

同

538 一うき草のうへはしけれる淵なれやふかき心をしる人のなき
同

同

539 一打わひてよはゝむこゑに山ひこのこたへぬ山はあらしとそ思
同

同

540 一心かへする物にもかゝたこひはくるしき物と人にしらせん
物にもかは物にもかな也かた恋獨(カタコヒ)恋也

同

541 一よそにしてこふれはくるしいれひものおなし心にいさむすひてん

入ひもとはくひかみのある装束ニめひもをひもとてありとうは
うむすひのやうなる物也是を結に同心ニまはして結は同心に契
らんと也

542 一春たてはきゆるこほりのゝこりなく君の心はわれにとけなん
義なしとけなんと念願也
【校異】なん―む

同

543 一あけたてはせみのおりはへなきくらしよるは蛍のもえこそわたれ
同　明れは也

同

544 一夏虫の身をいたつらになす事もひとつ思によりてなりけり
同　蝉をも蛍をも云也是は火蛾（カ）とて火とり虫也青蛾あをき虫也
一思は初一会也
【校異】会―念

同

545 一ゆふされはいとゝひかたきわか袖に秋のつゆさへをきそはりつゝ
夕されはとは夕なれはと也そはりつゝそふたる也秋の感也

同

546 一いつとても恋しからすはあらねとも秋のゆふへはあやしかりけり
義なし秋感なり

同

547 一秋のたのほにこそ人をこひさらめなとか心にわすれしもせん
ほとはあらはれて也しやうたいに恋たる也まほとまをとの事也
引哥俊成卿千載にみなれ木の見なれそなれてふす苔のまをなら
すとも逢よしもかな也

同

548 一秋のたのほのうへをてらすいなつまの光のまにも我やわするゝ
義なし

同

549 一人めもる我かはあやな花すゝきなとかほに出て恋すしもあらん
同　あやなはあらあやかしと云也我と我を不審也

同

550 一あは雪のたまれはかてにくたけつゝわか物思のしけきころ哉
義なしかてはたまりかたしと也かへりかても同心也たまりかた
き也（＊）

同

551 一おく山のすかのねのしのきふる雪のけぬとかいはんこひのしけき
に
しのき凌（シノキ）世俗ニ山の高をしのきて凌（レウ）は暦也とてふるゝ也侵（ヲカス）も
ふるゝ心也すかのねは菅根也
【校異】すかのねは―＊

第十二　恋哥二

552 一思つゝぬれはや人のみえつらむ夢としりせはさめさらましを
義なし

小野小町

同

553 一うたゝねにこひしき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき
同

同

554 一いとせめて恋しき時はむはたまの夜の衣をかへしてそきる
同　人を夢ニみんとて衣をかへす事常の事也古哥に袖をかへしてともあり

素性法師

555 一秋風の身にさむければつれもなき人をそたのむくるゝ夜ことに
同　獨寝の感なり

［556］ 一しもついつも寺とは下御霊（シモコレウ）也つはやすめ詞也姉小路［ママ］西洞院にもありと也此事書の末に人のわさしけるとは法会なとの事也真せい法師とある彼は山の法師也いへりけり言ニとは法文也法華経五百弟子品ニ不覚内衣裏有無価宝珠（フカクナイヘリウムケホウシユ）の言はと也此人因明（イミヤウ）法文と云物を空に書し人也名聖也

あへのきよゆきの朝臣

556 一つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり
義なし

こまち

返し

557 一をろかなる涙そゝてにたまはなす我はせきあへすたきつ瀬なれは
よのつね思こそ涙は玉共なれ我は涙のたきのことくなると也

【校異】涙の―＊

藤原としゆき朝臣

558 一こひわひて打ぬるなかに行かよふ夢のたゝち（タ）はうつゝならなん
義なし夢のたゝち直道也

同

559 一すみの江の岸による浪よるさへや夢の通路人めよくらん
序哥也夢のおとろくかうつゝに人目をよくる如くにあるとなり

をのゝよしき

560 一わか恋はみやまかくれの草なれやしけさまされとしる人のなき
義なし

紀とものり

561 一夜ゐのまもはかなくみゆる夏虫に迷まされる恋もするかな
義なし蛍なと也蛍はよひのま也我は終夜〳〵迷と也

同

562 一夕されはほたるよりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき（恋しきイ）
義なしけには勝異（スクレタリケニ）万葉

同

563 一さゝのはにをくしもよりもひとりぬるわか衣手そさえまさりける
義なし

同

564 一わかやとのきくのかきねにをくしもの梢かへりてそ恋しかりける
義なし

同

565 一河のせになひく玉藻のみかくれて人にしられぬ恋もするかな
義なしみかくれては水ニかくるゝ也玉くしの葉にみかくれて柳のはにかくるゝ也水なけれとも云也（＊）

【校異】柳―榊　＊―玉ぐしの葉のうたはみへかくれて也

566 一かきくらしふるしら雲のしたきえに消て物思ころにも有かな
義なし序哥也

同

567 一君こふる涙のとこにみちぬれは身をつくしとそ我は成ける
義なし

藤原おきかせ

568 一しぬる命いきもやすると心見に玉のをはかりあはむといは南
義なし玉のをはかりはそとの事也

同

【校異】玉のをはかりはそとの事也―＊

569 一わひぬれはしゐてわすれんと思へとも夢といふ物そ人たのめなる
義なし人たのめなるとは人のたのみになるかと也

同

570 一わりなくもねてもさめても恋しきか心をいつちやらは忘ん
義なし起臥（キクワ）動静（トウシヤウ）忘ぬ也

よみ人しらす

【校異】臥―居

571 一恋しきにわひてたましゐまとひなはむなしきからの名にや残らん
同　むなしきからは死人也

同

【校異】死人―死骸

572 一君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし
同　胸の火を涙の消と也

きのつらゆき

573 一世とゝもになかれてそ行涙河冬もこほらぬみなわ也けり
同　みなわは水の淡也

同

574 一夢ちにも露やをく覧よもすからかよへる袖のひちてかはかぬ
同

同

575 一はかなくて夢にも人をみつるよはあしたのとこそおきうかりける
同　切なる心也

素性法師

576 一いつはりの涙なりせはから衣しのひに袖はしほらさらまし
偽の涙平仲か事の類ニ非す偽に恋しきといはゝなにしに忍て袖をしほるへきなみたをかくすより真実ニおもふと也

ふちはらのたゝふさ

577 一ねになきてひちにしかともはるさめにぬれにし袖とゝはゝこたへん
義なし

大江千里

578 一わかことく物やかなしき郭公時そともなくよたゝなくらむ
同　よたゝは夜ひとよ也

としゆき朝臣

579 一さ月山こするゐをたかみほとゝきすなくねそらなる恋もするかな
たゝたかきいはん為也をのか五月なれは惣して余情有五月山摂州の名所とも

つらゆき

凡河内みつね

580 一秋きりのはるゝ時なき心にはたちゐの空もおもほえなくに
義なし

清原ふかやふ

581 一虫のこと声にたてゝはなかねとて涙のみこそしたになかるれ
同　虫のことは如也
【校異】虫のことは如也―＊

よみ人しらす

582 一秋なれは山とよむまてなくしかに我おとらめやひとりぬるよは
同　山とよむはおとろかす心也

つらゆき

583 一秋のゝにみたれてさける花の色のちくさに物を思ころかな
ちくさに物をは種々ニ物思也

みつね

584 一ひとりして物をおもへは秋のよのいなはのそよといふ人のなき
義なしそよとはされはよと答也

ふかやふ

585 一人を思心はかりにあらねとも雲ゐにのみもなきわたるかな
同　雲ゐは禁中の事ニ非すうはの空也

たゝみね

586 一秋かせにかきなす琴のこゑにさへはかなく人の恋しかるらん
かきなすは琴をかきならす也秋のしらへは平調（ヒヤウテウ）也万葉ニ時もりの打なすつゝみこゑきけは時にも成ぬ君にあはんかもうちなすはうちならす也時守の事禁中ニ一時〳〵ニ申事あり乞巧奠（キコウテン）の時子一丑二なと云也昔は一剋〳〵ニ申し也

つらゆき

587 一まこもかるよとの沢水雨ふれはつねよりことにまさる我こひ
序哥也義なし

同

588 一こえぬまはよしのゝ山の桜花人つてにのみきゝわたるかな
同　事書ニみゆる
【校異】事書ニみゆる―＊

［589］一やよひ許に物のたうひけるとは物の給ひける也せうそこすとは消息（ソコ）いきとをりをけしやすむる也
【校異】やよひ許―事書　せうそこすとは―＊

同

589 一露ならぬ心を花にをきそめて風ふくことに物思そつく
義なし

坂上これのり

590 一わか恋にくらふの山のさくら花まなくちるともかすはまさらし
くらふ山は恋にくらへたる也

むねをかのおほより

591 一冬河のうへはこほれるわれなれやしたになかれて恋わたるらん
義なし

たゝみね

592 一たきつせにねさしとゝめぬうき草のうきたる恋も我はするかな
同

とものり

593 一よゐ〳〵にぬきてわかぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

かけては心をかけて也かけて我ぬるは衣架(イカ)也ひるの衣を夜はかくる也

594 一あつまちのさやのなか山中〳〵になにしか人を思そめけん
義なしさやの中山逢州也古哥ニ日数行草の枕をかそふれは露をきそふるさ夜の中山とあり定家卿少年の時さ夜と詠俊成卿ニ云ク夜の用なくはさやこそとありしと也
同

595 一しきたへの枕のしたに海はあれと人をみるめはおひすそ有ける
義なし
同

596 一年をへてきえぬ思はありなからよるのたもとは猶こほりけり
同　おもひを火ニ也
同

597 一わか恋はしらぬ山ちにあらなくに迷心そわひしかりける
つらゆき
同

598 一紅のふりいてつゝなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ
くれなゐは血の涙也ふりいては紅する時あり紅涙の事宝篋印(ホウケウイン)経ニ仏血の涙して衆生を悲給ふ也色まさるは紅ニ非す涙の色也
同

【校異】涙―涙の事

599 一白玉とみえし涙も年ふれはからくれなゐにうつろひにけり
我涙の不変なる白玉とみえつるか今はそめぬるはかり也と也切なる心也
同

【校異】也―成

600 一夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬへらなり
義なし
みつね

601 一風ふけは峯にわかるゝ白雲のたえてつれなきゝみか心か
同　しやうへんにたへたるなと云類也絶頂(セッチャウ)絶妙(セツメウ)通用也
たゝみね

602 一月影に我身をかふる物ならはつれなき人もあはれとやみん
義なし
同

603 一こひしなはたか名はたゝし世中のつねなき物といひはなすともそなたの名の立へきと也我は世間の無常といひなすともと也
（＊）
ふかやふ

【校異】＊―そなたゆへに人のいはんと也。人の名はたゝじと也

604 一つのくにのなにはのあしのめもはるにしけき我恋人しるらめや
義なしめもはるはるかに也又春の事も有也
つらゆき

【校異】有―通

605 一手もふれて月日へにけるしらま弓おきふしよるはいこそねられねいこそねられねは寝事也いきたなき(き歟)と云も寝きたなき也手もふれぬはあはぬ心也おきふし弓もくせ出来也
同

606 一人しれぬ思ひのみこそわひしけれわか歎をは我のみそしる

義なし

607 一事にいてゝいはぬ斗そみなせ川したにかよひて恋しき物を
義なし水なき瀬と云心也水無瀬河と書によりて也
とものり

608 一君をのみおもひねにねし夢なれはわか心からみつる成けり
みつね

609 一いのちにもまさりておしくある物はみはてぬ夢のさむる也けり
たゝみね

610 一梓弓ひけはもとするゑわか方によるこそまされ恋の心は
はるみちのつらき

611 一我こひはゆくゑもしらすはてもなしあふをかきりと思はかりそ
みつね

612 一我のみそかなしかりける彦ほしもあはてすくせる年しなけれは
以上五首義なし
同

613 一今はゝや恋しなましをあひみんとたのめし事を命成ける
たのめし事とは少頃事也
【校異】たのめし事とは少頃事也―＊
ふかやふ

614 一たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん
こりぬ心はそなたにそ御しりあらんとなり
みつね

615 一いのちやはなにそは露のあた物をあふにしかへはおしからなくに
なにそはは命はなにならすと也御説也あふにかへは命もおしからしと也

第十三　恋三

［616］ 一やよひのついたちよりしのひに人にものらいひてとは物らはたゝ
物いふ也むかしの言也教長卿説ニ道風むすめの方へいまゆふさり
まいりこんくはしき事らまのあたりに申さうするとありそほふり
は非大雨
【校異】やよひのついたちよりしのひに人に―＊　事ら―ことゞ〳〵

616 一たきもせすねもせてよるをあかしては春の物とてなかめくらしつ
なかめは長雨也三日して過をは霖と云也
在原業平朝臣

617 一つれ〳〵のなかめにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし
是雨の方を兼て也徒然（トセン）ともつれ〳〵ともつく〳〵とも同心也
としゆきの朝臣

618 一あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへなかるときかはたのまん
義なし返しにおもしろしと也
なりひらの朝臣

619 一よるへなみ身をこそ遠くへたてつれ心は君かゝけとなりにき
よるへなみはよるへなき也波をそへて也思人によるへく事はな
けれと心をは影のことくにそへてやると也（＊）
よみ人しらす

【校異】＊―又、別抄に云、よるべとは、たとへば立よりたのむ縁などあるあたりを云也。無縁にさしはなれたるをよるべなしとは云也。此事只よるべ

と云こと葉にて歌にもよみ詞にもかけば、昔の人はうたがひ思事もなく云伝ふるを、近世に物のよししらずふるき事を見さとらぬものゝ源氏物語に加茂祭のによるべの水とよみたるは、社頭に神水とて瓶に入たる水也など自由に言出したるは、徒ごと也。同物語の傍の巻〳〵をだに見ざりける、いふかひなき事也。後撰歌、滋幹少将、なるとよりさしいだされし舟よりも我ぞよるべはなき心ちする

同

620 一いたつらにゆきてはきぬる物ゆへにみまくほしさにいさなはれつゝ
義なしいさなはれつゝは誘引

【校異】いさなはれつゝは―＊

同

621 一あはぬよのふるしら雪とつもりなは我さへともに消ぬへき物を
義なし右の事書例の事也

【校異】右の事書例に事也―＊

なりひらの朝臣

622 一秋のゝに篠わけしあさの袖よりもあはてこしよそひちまさりぬる
義なしあさの袖朝の袖なり

【校異】あさの袖朝の袖なり―＊

小野小町

623 一みるめなきわか身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくくる
義なし我みさまのわろきをしらてと也あしたゆくゝるは足たゆく来也

源宗于朝臣

624 一あはすしてこよひ明なは春の日のなかくや人をつらしと思はん
義なし春の日はなかくいはん為也

みふのたゝみね

625 一ありあけのつれなくみえし別より暁はかりうきものはなし
別とはあはて帰心也暁はかりはあかつきほとゝ云也古今玄抄の哥と也

ありはらのもとかた

626 一あふことのなきさにしよる浪なれはうらみてのみそ立かへりける
異義なし伊勢物語の哥大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな下句同心也

よみ人しらす

627 一かねてより風にさきたつ浪なれや逢事なきにまたき立らん
さきたつなみとははやく名の立と云心也

たゝみね

628 一みちのくにありといふなるなとり河なき名とりてはくるしかりけり
義なし名とり川は奥州名取の郡あり人丸集みゆ

みはるのありすけ

（＊）

【校異】＊―有輔　贈太政大臣長良一男、四位。冬嗣御孫、母従五位下雅渕女

629 一あやなくてまたきなきなのたつたかはわたらてやまん物ならなくに
あやなくは無益也無名を歎にてはなき也わたらてやまんとはあはてやむへきとはおもはぬにまたき名か立かうたてしきと也

もとかた

630 一人にいさ我はなき名のおしけれはむかしも今もしらすとをいはん
義なし

よみ人しらす

631 一こりすまに又もなきなは立ぬへし人にくからぬよにしすまへは
惣して人をにくしと思事なき身なれは人のなにといはんをもし
らぬ也いくこひも名は立へきと也

なりひらの朝臣

632 一人しれぬ我かよひちのせきもりはよひ〳〵ことに打もねなゝむ
事書ニみえたり大鏡（カヽミ）ニ二条の后のみやつかひこそまつおほつか
なけれとあり

つらゆき

633 一しのふれとこひしき時は足引の山より月の出てこそくれ
義なしいてゝこそくれは出て行と也

よみ人しらす

634 一こひ〳〵てまれにこよひそあふ坂のゆふつけ鳥はなかすもあらな
ん
相坂の鳥にあらすあふと云言ニ付て也

をのゝこまち

635 一秋の夜もなのみなりけりあふといへはことそともなく明ぬるもの
を
ことそともなくはその事となき事也

凡河内みつね

636 一なかしとも思そはてぬ昔よりあふ人からの秋のよなれは
あふから源物人からとあるなり

よみ人しらす

637 一しのゝめのほから〳〵とあけゆけはをのかきぬなるそかなしき
ほから〳〵はほからかに也朗ホカラカ也成そかなしきとは其時
節の事也

【校異】ほからかに也―＊

藤原国経朝臣

638 一あけぬとて今はの心つくからになといひしらぬ思そふらむ
いひしらぬとは言語道断ニ我もえしらぬ也

としゆきの朝臣

639 一あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつゝ
義なしこきたれはかきたれて也ひたふりにふる也そをちつゝ也

［640］

【校異】一寵テウヲ用也一説ウツクト也
【校異】寵テウヲ用也一説ウツクト也―＊

寵

640 一しのゝめの別をおしみ我そまつ鳥よりさきに鳴はしめつる
義なし

よみ人しらす

641 一郭公ゆめかうつゝかあさ露のおきてわかれしあかつきの声
同　起て別し可然也

同

642 一玉連（クシケ）あけは君かなたちぬへみよふかくこしを人みけんかも
義なし夜ふかくこしとは夜来たるを人や見たると也立ぬへみは
たちぬへしと也

643 一けさはしもおきけん方もしらさりつ思いつるそきえてかなしき
霜也しもをやすめ詞のことく面白しと也霜に付ては朝は起ける方も（＊）

【校異】＊―しらぬと也

大江千里

644 一ねぬる夜の夢をはかなみまとろめはいやはかなにも成まさるかないやはかなにもは弥はかなきたのみと也

なりひらの朝臣

645 一君やこし我やゆきけんおもほえす夢かうつゝかねてかさめてか
事書ニあらは也みそかにとは密々（ミツ）也教長卿御説ニ恋の哥第一の哥と也

よみ人しらす

646 一かきくらす心のやみに迷にき夢うつゝとは世人さためよ
義なし当集ニ世人也

なりひらの朝臣

647 一むはたまのやみのうつゝはさたかなる夢にいくかもまさらさりけり
義なしいくらをいくかもともあり同心也やみのうつゝとはうつゝともなき契はよくみえたる夢にはいかほともまさらぬと也

同

648 一さ夜ふけてあまのとわたる月影にあかすも君あひみつるかな
義なし

同

649 一君か名もわかなもたてし難波なるみつともいふなあひきともいはし
義なしみつは難波の御津也

同

650 一名とり河せゝのむもれ木あらはれはいかにせよとか逢みそめけん
同（＊）

【校異】＊―此うたなき本有

同

651 一吉野河水の心ははやくとも瀧のをとにはたてしとそ思
同

同

652 一こひしくはしたにをおもへ紫のねすりの衣色にいつなゆめ
ねすりは紫根にて摺たる衣と御家説なり清輔卿奥義ニは寝てする衣と也後撰に堀川右大臣人しれてねたさもねたし紫の根すりの衣うはきにをせん返し泉式部ぬれ衣と人にはいはん紫のねすりの衣うはきなりとて紫は物にうつり（ッ）やすき物なれは寝て摺たると云心なり根と用給ふ也

注（2）

家々本ニ入哥

よみ人しらす

一いぬかみのとこの山なるなとり河いさとこたへよ我なもらすな
返し
一やましなのをとはの瀧のをとにたに人のしりつゝ我恋めやも
うねめのたてまつれる

653 一花すゝきほにいでゝこひは名をおしみしたゆふひものむすほゝれつゝ
義なし
たちはなのきよきかしのひにあひしられける女のもとよりをこせたりける
をのゝはるかせ
よみ人しらす
【校異】たちはなのきよきかしのひにあひしられける女のもとよりをこせたりける―＊

654 一思ふとちひとり〳〵かこひしなはたれによそへてふち衣きむ
昔は朋友（ホウユウ）にも凶服をきたる也おもふとちは夫婦也源氏物語ニ紫の上ニ別ての時源氏君の言ニわかためにき給はゝ深く染んとあり夫のニは色ふかし婦のニはあさしと也
返し
たちはなのきよき

655 一なきこふる涙に袖のそほちなはぬきかへかてらよるこそはきめ
義なしそをち也
こまち

656 一うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるかわひしき
義なしみるかわひしき
同

657 一かきりなきおもひのまゝによるもこん夢ちをさへに人はとかめし
同
同

658 一夢ちにはあしもやすめすかよへともうつゝにひとめみしことはあらす
同　見しことはあらす
読人しらす

659 一おもふとも人めつゝみのたかけれは河とみなからえこそわたらね
同
同

660 一たきつせのはやき心をなにしかも人めつゝみのせきとゝむらん
同　切なる心也

注（3）
君か名もわか名もたてし難波なる
　みつともいふるあひきともいはし
なきこふる涙に袖のそほちなは
　ぬきかへかてらよるてそはきめ
しらかはのしらすともいゝしそこ清み
　清てよるはすまんと思へは
むらくにのたちにしわかな今更に
　事なしふともしるしあらめや

661 一紅の色にはいてしかくれぬのしたにかよひて恋はし（死するに非す）ぬとも
同　色をいはん為ニ紅と云也
きのとものり
みつね

662 一冬の池にすむにほとりのつれもなくそこにかよふと人にしらすな
同　序哥也

663 一さゝの葉にをくはつ霜のよをさむみしみはつくとも色にいてめや
しみはつくともとはしみこほりたる事なり切なる心によせて
同

664 一山しなのをとはの山のをとにたに人のしるへくわかこひめかも
義なし
よみ人しらす

665 一みつ塩のなかれひるまを逢かたみゝるめのうらによるをこそまて
塩のひると昼とを読也
きよはらのふかやふ

666 一しらかはのしらすともいはしそこ清み流てよゝにすまんと思へは
すまんとは契てすむへきと也
平貞文

667 一したにのみこふれはくるし玉のをのたえてみたれん人なとかめそ
義なし
とものり

668 一我こひをしのひかねては足曳の山たちはなの色にいてぬへし
同　山橘は赤物也如此読也
同

【校異】也―なるにより

669 一おほかたはわかなもみなとこきいてなんよをうみへたにみるめす
くなし
みなとは皆の心也世をうみへたに一説用ゆへたに一説也海へた
に也海辺也こゝにてもみるめすくなしと也海半（ウミヘタ）とも沖渚（ヲキミキワ）とも
也万葉ニあふみの海へたは人しるおきつ波君をゝきてはしる人
もなし後撰ニなにせんにへたのみるめをおもひせんおきの玉も
をかつく身にして
よみ人しらす

【校異】用ゆ―也　あふみの海―あわみ海の　おきの―おきつ

670 一枕より又しる人もなき恋を涙せきあへすもらしつる哉
義なし
平貞文

671 一風ふけは浪打岸の松なれやねにあらはれてなきぬへら也
義なし
よみ人しらす

672 一池にすむなをゝしとりの水をあさみかくるとすれとあらはれにけ
り
義なし名のおしきと也
同

673 一あふ事はたまのをはかりなのたつはよしの河のたきつせのこと
同　そとの事也
同

674 一むら鳥のたちにしわかな今更に事なしふともしるしあらめ
事なしふともとは事なしかほをするともそのしるしあるましき
と也古くはことなしひとも云也
同

675 一君によりわかなは花に春霞野にも山にもたちみちにけり
君を思ニよりて也花に春かすみは花々しくたつと也霞の春たつ
ことく我名かたつと也

676 一しるといへは枕たにせてねしものをちりならぬなの空にたつらん
義なし

伊勢

第十四　恋歌四

677 一みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人に恋やわたらん
序哥也あさかの沼ニは菖蒲なきと云説あり実方陸奥守にて下向時端午ニあやめを被尋しになしとてこもを似せてふかれしと也こもをあやめに用ゆる心得へきと也殿上根合ニ藤原高善あやめ草引手もたゆくなかき根のいかにあさかの沼におひけん負ニならす金葉ニ入也御物語ニ六条右大臣の息ニ皇后宮大夫信正と云人彼国ニ任して下向時上洛して俊成卿ニ物語ニ実方以後出来歟あさかのぬまにあやめありと也其時の物語ニむろのやしまさせる所にてもなししほかまの浦伊物ニわか君六十余国か内と云いつくはあれとしほかまのと云哥よまぬ身にてもせんかたなくおもしろしとありしと也此人心のまゝ物かたりせしと也

よみ人しらす

678 一あひみすは恋しき事もなからましをとにそ人をきくへかりかる
義なし

同

679 一いそのかみふるのなかみち中々にみすは恋しと思はましやは
同　長道と一説不用さやの長山とも云事あり不用ふるとは布（フ）の釼を留事あり中道を用也

つらゆき

680 一君といへは見まれみすまれふしのねのめつらしけなくもゆる我恋
（＊）義なり御家本はきみてへはとあり定家同心也

【校異】＊―忠行　遠江守有定男

ふちはらのたゝゆき

681 一夢にたにみゆとは見えしあさな〳〵わかおもかけにはつる身なれは
夢にも人にはみゆるとはみえしと也恋やつれかはつかしきとなり

伊勢

682 一いしまゆく水のしら浪立帰りかくこそはみめあかすも有かな
義なし石の間を行水はする〳〵とはゆかてめくるとなれはたちかへりとある也

よみ人しらす

683 一いせのあまのあさなゆふなにかつくてふみる（ママ）めに人をあくよしもかな
義なしかつくとはかいつ物とていそうをみるなとの事也

同

684 一春霞たなひく山のさくら花みれともあかぬ君にも有かな
義なし序哥也

ともゝり

685 一心をそわりなき物と思ぬるみるものからや恋しかるへき
義なし見る物からやとはみることに恋しきと也

ふかやふ

686 一かれはてむ後をはしらて夏草のふかくも人のおもほゆるかな

凡河内みつね

会者定離を云心也

687 一あすか河ふちはせになる世なりとも思そめてむ人は忘し
人は忘しとは誓言也

よみ人しらす

家々ニ本ニ入哥　そとをりひろか哥
我かせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

【校異】家々ニ本ニ入哥　そとをりひろか哥　我かせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも―＊

688 一おもふてふ事のはのみや秋をへて色もかはらぬ物には有らん
義なし思の不変なると也

同

689 一さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうちのはしひめ
宇治の橋姫事不審未決と也宇治の姫大明神とりくうと両神毎夜通給ふとあり或は住吉大明神通給ふとなり橋姫の物語と云物ニ委みゆる也未見給ふと也橋は孝謙天皇(ケンソ)の御宇にかゝる也右の事書ニは玉姫とある橋を(そ歟)のきて有かと也

【校異】の―橋　也―云々

690 一きみやこむ我やゆかんのいさよひにまきのいたともさゝすねにけり
義なしいさよひはやすらふ心也月は不知夜(イサヨイ)と也

そせい法師

691 一今こむといひしはかりに長月の在明の月をまちいてつるかな
一夜の内ニ非すたのみて夜々をへてはや長月も有明の頃ニ成たると也

よみ人しらす

692 一月夜よし夜よしと人につれやらはこてふにゝたりまたすしもあらす
異義なし月夜もよきと也よしさらはなとにてはなし吉也月よにあらす夜也

【校異】なし―なき也　吉―好

同

693 一君こすはねやへもいらしこむらさき我もとゆひに霜はをくとも
義なしもとゆひは紫のくみにてする也こ紫とはこまやかなる色也

【校異】こ紫とはこまやかなる色也―濃紫也

同

694 一宮木のゝもとあらのこ萩露をゝもみ風をまつこと君をこそまて
義なし風をまつことく也もとあらは若枝の萩也

同

695 一あな恋し今もみてしか山かつのかきほにさける山となてしこ
見てしかはかな也

同

696 一つのくにのなにはおもはす山しろのとはに逢みむ事をのみこそ
なにはとは名もんニはなき也とは(わ)にとよむ也ときはに也きを略也此なにはを大樹常徳院殿なにとも思はぬと被仰し也異説也

つらゆき

697 一しきしまの山とにはあらぬ唐衣ころもへすして逢よしもかな

序哥也義なし

ふかやふ

698 一恋しとはたかなつけゝん事ならむしぬとそたゝにいふへかりける
義なし

家々本ニ入哥　つらゆき

みちしらはつみにもゆかむすみのえの岸におふてふこひにすれ草

【校異】家々本ニ入哥　つらゆき　みちしらはつみにもゆかむすみのえの岸におふてふこひにすれ草―＊

よみ人しらす

699 一みよしのゝおほかはのへの藤なみのなみにおもはゝわか恋めやは
義なし序哥也大河のへとは花も藤もある也なみニ思は人なみ也

同

700 一かくこひむ物とは我も思にき心のうらそまさしかりける
義なし

同

701 一あまのはらふみとゝろかしなる神も思ふ中をはさくる物かは
同　さくる物かはとよむ也

702 一梓弓ひきのゝつゝら末つゐにわか思人に事のしけゝん
ことのしけゝんとは口舌のしけき也喧嘩と云も口舌也末つゐには後つゐニ也卿ニ撰（エラヒ）レ無事ヲ二身ニ撰無レ行レ事レ引哥我ゆへニいたくなわひそのちつゐにあはしとおもふ我ならなくに右ニあめのみかとは天智の御事

【校異】此歌の心、たとへば思中のいかなる事かいでこんとあやぶみおもひしに、末つゐに此人に事のしげゝんとは、よからぬ口舌いできにたりと云心也。事しげしとは、諍論口舌を云ならはしたり。万葉、人ごとはしげみこちたみ老が世にいまだわたらぬ朝河渡る。後撰、ことしげししばしはたてれよひの間にをけらんつゆは出てはらはん、末つゐにとは、末に成て終に思もしゝ（る歟）事いできぬと云也。万葉十一、玉の緒をくゝりよせつゝ末遂にゆきはわかれす同じ世にあらん、後つゐにいもにあはむと朝露の命はいけりこひはしけれど、我故にいたくな詫そ後終にあはじと思ひし我ならなくに、高円の野べはふくずの末遂にちゞにわすれんわがおほきみかも、後つゐに、末つゐに、唯同事也。此心にてこそ、返しの、夏引の手引の糸をくり返しことしげくともたゝんと思ふな、此歌も叶て聞ゆれ。末の字は後読字也。孝経云、無撰言身無撰行

703 一夏引のてひきのいとをくり返し事しけくともたえむと思な
義なし口舌ありとも思たえしと也

704 一さと人の事は夏のゝしけくともかれ行君にあはさらめやは
ことは夏ののしけくともとは口舌にて中絶はするとも又あはんと也さと人つねに云里人ニあらす児喝食の里と云もみやつかへ人の里と云も都の事也今の内裏を里内裏と申も京中也世間の人と云心也

[705] 一いまうてくとは只今まいらんと也

【校異】いま―＊

在原業平

705 一かすゝにおもひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされる

事書ニみゆ心中の深浅はとひかたきと也身をしる雨は涙也

よみ人しらす

706 一おほぬさのひくてあまたに成ぬれは思へとゑこそたのまさりけれ
事書にみゆ

【校異】みゆ―みえたり

なりひらの朝臣

707 一おほぬさとなにこそたてれなかれてもつゑによるせはありてふ物を
返し義なし

よみ人しらす

708 一すまのあまの塩やく煙風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり
義なし

同

709 一玉かつらはふきあまたに成ぬれはたえぬ心のうれしけもなし
同　草かつら也玉とはほめたる言也たえぬ心のは我にはたえねともうれしくはなきと也思へとゑこその同心なり

同

710 一たか里によかれをしてか郭公たゝこゝにしもねたる声する
そへたる哥也義なし

同

711 一いて人は事のみそよき月草のうつし心はいろことにして
世俗ニ云いてと同心也ことのみそよきは言と心と相違あると也
うつし心は現心（ケンシン　ウツシコヽロ）是は定心ニなきと也

同

712 一いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことの葉うれしからまし
義なし

同

713 一いつはりと思物から今更にたかまことをか我はたのまむ
同　物からはゆへ也

素性法師

714 一秋風に山の木葉のうつろへは人の心もいかゝとそ思
同

とものり

715 一蝉のこゑきけはかなしな夏衣うすくや人のならむと思へは
同　序哥也

よみ人しらす

716 一空蝉のよの人ことのしけゝれはわすれぬものゝかれぬへら也
物いひさかなきによりてもしやかれんと也

同

717 一あかてこそ思はん中ははなれなめそをたに後の忘かたみに（ソレヲダニ）
義なし

同

718 一わすれなんと思心のつくからにありしよりけにまつそかなしき
同　忘なんとよみ切てと思心とよむ也

同

719 一忘なん我をうらむな郭公人の秋にはあはんともせす
人の秋にはとは人のあくにはあふましき也

同

720 一たえすゆくあすかの河のよとみなは心あるとや人のおもはん

義なしよと見なはとは心のゝとかならはよそ心やあるとおもはんと也右ニ中臣東人（ナカトミノアツマヒト）仮名也

【校異】右中臣東人―＊　仮名也―＊

同

721 一よと河のよとむと人はみるらめと流てふかき心あるものを
義なし

そせい法師

722 一そこひなきふちやはさはく山河のあさきせにこそあた浪はたて
義なしあた浪はあた名也

よみ人しらす

723 一紅のはつ花そめのいろふかく思しこゝろ我わすれめや
義なし

かはら左大臣

724 一みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれんと思我ならなくに
義なし

よみ人しらす

725 一思ふよりいかにせよとか秋風になひくあさちの色ことになる
思に猶過てと也　同

【校異】過て―返て

同

726 一ちゝの色にうつろふらめとしらなくに心も秋のもみちならねは
心の万ニうつるもえしらぬ也我心かもみちならはこそ色のいろ〳〵にうつろふしらんと也

【校異】万ニうつる―移（万）　色の―＊

小野小町

727 一あまのすむさとのしるへにあらなくに　怨（ウラミ）むとのみ人のいふらん
義なし

しもつけのをむね

728 一くもり日の影としなれる我なれはめにこそみえね身をはゝなれすくもりたる日も物の影はみゆる也目ニこそ見えねとは凡見（ホンケン）にてみぬまて也影はゝなれぬと也

つらゆき

729 一色もなき心を人にそめしよりうつろはんとはおもほえなくに
義なし

よみ人しらす

730 一めつらしき人をみむとやしかもせぬ我下ひものとけわたるらむ
義なししかもせぬは然も也さやうにもせぬ也人のこふる時おひのとくる事あり

同

731 一かけろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれは袖そぬれぬる
義なしふる人いはんために春雨と云也春雨のつれ〳〵によりてあれは也ふる人はふるさるゝ人と也蜻蛉（カケロウ）テン外ノ遊糸アルトキハイウフ也

【校異】イウフ―蜉蝣

同

732 一ほりえこくたなゝしを船こきかへりおなし人にや恋わたりなん
義なしたなゝし小舟とは舟ニ棚（タナ）ある也小船ニはなき也ほり江はほりたる所也

伊勢

733 一わたつみとあれにしとこを今更にはらはゝ袖やあはとうきなん
義なしあれにしいはん為わたつみと云也あわとうきなんとは涙の水によせて也

【校異】也―なめり

つらゆき

734 一いにしへに猶立帰るこゝろかなこひしきことに物わすれせて
義なし恋しきことにとよむ也

大伴くろぬし

735 一思いてゝこひしき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや
事書に見えたり

典侍藤原よるかの朝臣

736 一たのめこしことのはいまはかへしてむ我身ふるれはをき所なし
事書ニみゆ我身ふるれはとは身のふりたるにをき所なきを文をも云也

大伴くろぬし

[737] 一返し近院右大臣也能有文徳ノ源氏右大臣左大将也

【校異】返し―＊　右大臣也―＊

近院の右のおほいまうちきみ

737 一今はとてかへすことのはひろひをきてをのか物からかたみとやみん
義なし

よるかの朝臣

738 一玉桙の道はつねにもまとはなん人をとふとも我かと思はむ
同　人をとふとも我ニせんと也せめての事也

【校異】せそて道にまよひありきて我かといひてあはんと也　桙（ホコ）イ本―＊

よみ人しらす

739 一まてといはゝねてもゆかなんしゐてゆくこまのあしおれまへのたなはし
義なし

[740] 一中納言昇の朝臣は延喜八年二月ニ中納言九年ニ民部卿十四年大納言

【校異】中納言昇の朝臣は―のぼる

[740] 一閑院　女房也　源のつきかけの女也昇か女也

閑院

740 一相坂のゆふつけとりにあらはこそ君かゆきゝをなく〳〵もみめ
義なし

伊勢

741 一ふるさとにあらぬ物からわかために人の心のあれて見ゆらむ
同

寵

742 一山かつのかきほにはへるあをつゝら人はくれとも事つてもなし
山さとに住にてなしつゝらニよせて人はくれともと詠也

さかいのひとさね

743 一おほそらは恋しき人のかたみかは物思ことになかめらるらん
義なし（＊）

【校異】＊―酒井人真、左中史、河内国人也

よみ人しらす

744 一あふまてのかたみも我はなにせんに見ても心のなくさまなくに

おきかせ

745 一あふまてのかたみとてとゝめけめ涙にうかふもくつ成けり

同　我とゝむるにあらす其方ニのこし給と也もくつは女房のもをよせてなり

よみ人しらす

あすかい家ニはあたを用は事書ニも

746 一かた見こそ今はあたなれこれなくはわするゝ時もあらまし物を

定家卿はあたを用給ふと見えたり何もよき説也

義なしあたなれあたをもすてすあたは哥の本意たつ也定家卿時分院の殿上の哥合ニ講師のあたとよむを傍の人の吠[ヤヒ]けれは定家卿同心也たゝことはのよきにつくへき也

【校異】あすかい家ニはあたを用は事書ニも―＊　定家卿はあたを用給ふと見えたり何もよき説也―＊　あたをも―あだなれとも　吠―わらひ

注

（1）泉紀子「飛鳥井家の古今集注釈―『蓮心院殿古今集註』から『栄雅抄』へ―」（『国語国文』五二号、昭和五八年三月）

（2）二五丁表にみられる貼り紙で、本文と同筆の墨書である。他本には見られない。

（3）二五丁、二六丁間に挟まれた一紙。（2）と同様、本文と同筆で、他本にはない。

（ひだか　あいこ・本学大学院博士後期課程）

※本稿をなすにあたり、資料の閲覧及び翻刻の許可を戴いた京都府立総合資料館に深謝申し上げます。